



慶應医学賞のあゆみ

（世界の医学・生命科学研究者を顕彰）

「慶應医学賞」をご存じだろうか。2017年10月にノーベル賞受賞者が発表されたが、実は歴代ノーベル賞受賞者には、慶應医学賞の受賞者が7名もいる。優れた業績をあげた医学・生命科学の世界最先端の研究者を顕彰するこの慶應医学賞を、一私学である義塾が主宰・運営していることは、大きな誇りである。

賞制定の発端は 塾員、坂口光洋君の寄付

2017年の第22回受賞者は、「機械的MRIの開発」研究の小川誠二博士（東北福祉大学感性福祉研究所特任教授）と、「がん幹細胞の同定」研究のJohn E. Dick博士（トロント大学分子生物学教授）の2名。11月30日に信濃町キャンパスで授賞式および受賞記念講演会が開催され、国内外の関係者や医学部学生が多数出席した。

慶應医学賞の第1回は1996年。その原資となったのは、塾員の坂口光洋君（1940年医学部卒業）からの寄付50億円である（1999年に20億円の追加寄付）。

坂口君は医学部卒業後、生理学教

室と解剖学教室助手を務めながら博士号を取得、その後、日本大学医学部教授を経て整形外科を開業していた。80歳を機に贈った寄付については、「義塾における医学研究の奨励と創造的發展に貢献するとともに、世界の医学の進歩に寄与する」ことを目的に、医学・生命科学研究発展のための国際賞設立、世界の研究者を義塾に招いての国際交流、医学部の研究費充実に使うことを希望した。それをもとに慶應義塾医学振興基金が設立され、その利子が、同賞の賞金のみならず、医学部の研究費の助成等に充てられて、現在に至る。

所有していた土地を整理し母校である義塾に寄付された浄財は、今は故人となった坂口君の遺志を継いでこれからも生かされ続ける。

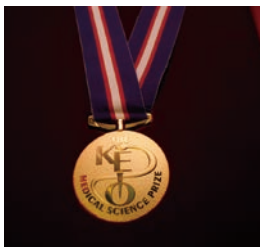
世界中から推薦を募り 厳正に審査

慶應医学賞の受賞者は、世界各国の著名な研究者や研究機関から推薦された候補者の中から、厳正な審査を経て選ばれる。審査は数回行われ、最終審査では学内外の13名の審査員が受賞者を決定する。継続して活発な研究活動を行っており、今後も一層の活躍が期待される研究者の独創性と先進性を重視していることが特徴である。

慶應義塾医学振興基金の活動には、慶應医学賞のほかに、医学部学生や若手研究者の海外留学などの費用を補助する「医学国際交流事業」や、三四会（医学部卒業の塾員の組織）会員への「医学研究奨励事業」、医



第22回(2017年)の授賞式の様子



慶應医学賞のメダル

慶應医学賞歴代受賞者

第1回 Dr. Stanley B. Prusiner

- プリオンの発見とプリオン病の解明
- 1997年ノーベル生理学・医学賞受賞

クローンフェルト・ヤコブ病や牛の狂牛病の病原体であるプリオンの発見とプリオン病の遺伝的・生理的基盤の解明



中西重忠博士

第2回 Dr. Robert A. Weinberg

谷口維紹博士

第3回 Dr. Moses J. Folkman

御子柴克彦博士

第4回 Dr. Elizabeth H. Blackburn

■テロメアとテロメラゼ

- 2009年ノーベル生理学・医学賞受賞

線状染色体の末端にあるDNA部分テロメアの長さを維持する酵素「テロメラゼ」を発見。老化や発がんの仕組みの解明に貢献



吉川信也博士

第5回 Dr. Arnold J. Levine

中村祐輔博士

第6回 Dr. Tony Hunter

竹市雅俊博士

第7回 Dr. Barry J. Marshall

■ヘリコバクター・ピロリの分離培養と診断、治療法の確立

- 2005年ノーベル生理学・医学賞受賞

1982年に初めてヘリコバクター・ピロリ(ピロリ菌)の分離培養に成功。消化性潰瘍がピロリ菌への感染により引き起こされることを提示。ピロリ菌感染症の診断法の確立にも貢献



田中紘一博士

第8回 Dr. Ronald M. Evans

宮下保司博士

第9回 Dr. Roger Y. Tsien

■生きた細胞内のシグナル伝達の可視化と計測技術の開発

- 2008年ノーベル化学賞受賞

生きている細胞内のシグナル伝達の可視化とその定量方法を確立し、それを可能にする計測技術を開発。様々な解析手段を有機化学分野や細胞生物学分野の多くの研究者へ提供



第10回 藤吉好則博士

第11回 Dr. Thomas A. Steitz

■リボソームの構造解明及びそれに基づく次世代抗菌薬の開発

- 2009年ノーベル化学賞受賞

細胞内でタンパク質を合成する小器官リボソームの原子レベルの構造と機能を解明。薬剤耐性菌の出現が深刻な問題となるなか、新たな抗生物質の開発が可能に



第12回 Dr. Brian J. Druker

満屋裕明博士

第13回 Dr. Fred H. Gage

坂口志文博士

第14回 Dr. Jeffrey M. Friedman

寒川賢治博士

第15回 Dr. Jules A. Hoffmann

■昆虫における自然免疫システムとToll受容体の発見

- 2011年ノーベル生理学・医学賞受賞

昆虫を用いて、自然免疫(侵入した細菌などを取り除くための重要な生体防御機構)にTollと呼ばれるタンパク質の遺伝子が重要な役割を果たすことを発見。ヒトの自然免疫システムの理解にも貢献



審良静男博士

第16回 Dr. Philip A. Beachy

田中啓二博士

第17回 Dr. Steven A. Rosenberg

間野博行博士

第18回 Dr. Victor R. Ambros

長田重一博士

第19回 Dr. Karl Deisseroth

濱田博司博士

第20回 Dr. Jeffrey I. Gordon

大隅良典博士

■オートファジーの分子機構の解明

- 2016年ノーベル生理学・医学賞受賞

細胞が自分自身のタンパク質等の細胞成分を分解し再利用する「オートファジー現象」を解析。オートファジーの機能と生物学的意義を明らかにした



第21回 Dr. Svante Pääbo

本庶佑博士

第22回 Dr. John E. Dick

小川誠二博士

■=授賞研究テーマ

学部における各領域の研究促進を図る「医学研究助成事業」、そして「坂口光洋記念講座」の設置がある。「坂口光洋記念講座」は、これまで「発生・分化生物学講座」、「再生医学講座」、「機能形態学講座」の3講座が開講され、最先端の医療研究

に貢献した。現在はビッグデータを統合し、大局的に物事を見て医学・医療を展開する「システム医学講座」が運営されている。第1回慶應医学賞の授賞式で、当時の鳥居塾長が「賞はもらう人の名誉であると同時に、授ける側のさら

に大きな名誉でもある」と述べた。世界中の優れた研究者を表彰するところが、義塾の医学研究や医療のさらなる向上につながっている。義塾は、今後も学内にとどまらず、広く国際的な医学・生命科学の発展に貢献していく。